

教 育 学 に つ い て : ハ リ ス

する解決策は、教師養成のコースの在り方の変革ということである。即ち、教師になる訓練を受けている者は、法律に定められた最少限の「教育」のコースは厳格に履修しなければならないが、そのほかは専門教育のコースをできるだけ多く履修すべきであるという立場をとることである。要するに、教師養成の学部コースとリベラル アーツの学部コースとの間の極端な相違をなくするようにしなければならない。

現代アメリカにおける教職教育の問題点の第二は、教師が薄給であるという事実が教職教育を受けようとする学生の意欲をくじくことである。他の職業に比して教師の待遇がよくないことが十分に訓練された教師を得ることを困難にしているのである。

第二の問題点についての解決策は、教育に対して一層多くの金をとということである。教師は牧師と同じように西洋におけるあらゆる職業のうち物質的に恵まれるところが最も少かつたということは周知のことである。教師は今日は昔より楽に暮しているが、それでもなおアメリカの多くの地方においては教師の俸給は熟練しない労働者の給料の標準にも達しない。教師の俸給の平均は1945年以来アメリカにおけるあらゆる労働者の平均賃金よりも低い。多くの教師たちは本務以外の仕事の収入乃至は家族の誰かの収入によって生計を補っている。アメリカにおいて教育に費されている金は、1930年代の不景気の期間より今日の方がアメリカの収入の割合からは少いというのが実情である。教師に対して高給を支給することが教師のもつ多くの問題の解決策であり、ひいては教職教育の問題の解決策である。

現代アメリカにおける教職教育の問題点の第三は、教職を専門職として確立するところの職業の専門化の途中に教育がおかれているということである。アメリカにおいては教育は実践的技能の事柄であるとされ、教師は体系的な教育理論をもたずに職人気質をもっている。教職は専門化の方向に向つてはいるが、完全に専門職として育つてはならないということが、教職教育を受けようとする人びとにとって教職を魅力のない職業にしてしまうのである。

教職教育の問題点の第三についての解決策は、教師養成の大学乃至は学部を教職以外のあらゆる職業教育のための大学乃至は学部と対等の地位におくことである。医師や法律家の養成と同等の程度において科学的な知識と技術に基いて教師の養成をおこなう工夫をする必要があるのである。(抄訳)

人 格 性 に 就 て

片 岡 仁 志

教育指導は凡ゆる生活上の諸問題に即して、その問題の解決能力、選択決定の自主的能力を成長せしむるよう協力的援助をする活動であると言われる。従つてその究極の狙いは、問題そのものにあるのではなくて、自己指導力の促進成長にある、即ち自己の中に真の指導的自己を発見せしむることであり、真の自己を自得せしむることである。それは真の自己であると共に万人普遍の人間本性と称し得るものの自覚を意味するものでなければならない。かようなものが、果して存在し得るか、存在するとすれば、それは如

何なるものでなければならないか、それは如何にして認識し得るかと言うことが重大問題となる。然しか
 ような人間本性如何と云う問題は、古今東西の哲学、宗教が集中した究極問題点と云つてよく、簡単に明
 らかにし得ることではないが、何等か底分の解決をもたなければ教育は成り立たないので、それについて
 若干の考察をしてみよう。

1

先ずカント哲学に於て、かような問題は如何ように考察されているか。人間の本性とは、人間そのもの
 の性質であり、物自体としての人間の問題である。これは言う迄もなくカント哲学の中心課題で、昔から
 最も論議の多かつた問題である。カントは純粋理性批判に於て、物自体について徹底的な批判を試みてい
 る。その結果は、少くとも感性的認識を本質とする我々の認識能力にとつては、かかる超感性的対象は全
 く認識不可能である。悟性によつて論理的必然的に思惟せられねばならぬ概念であり、理念として認識論
 上有効な役割をも持つ概念ではあるが、何等認識論上の實在ではない。従つて物自体は、その認識に関す
 る限り、理論哲学の範囲外の問題として之を排除した。従つてこの認識の立場からは、物自体を認めない
 時間空間上の現象体の世界即ち自然界が成立する。人間もこの立場から考察すると自然界の一部を占める
 生物の一種と見做されねばならない。理性を有すると云う点に於て、他の動物と区別せられるけれども、
 自己保存、種族保存、集団本能等の本能を有し、自然必然の因果律の支配下に立つ点では、一般動物と何
 の異なるところもない。只人間は意識して自然の傾向性に従い、これ等の欲求の体系を幸福と名付けて、そ
 の満足を追求する。そして幸福のための手段として理性を使用し、人間特有の文明や文化を造り出す生物
 である。カントは衝動的機械的自愛を人間に於ける動物性の素質と呼び、理性的自愛は文化への動機とな
 るもので、これを人間に於ける人間性の素質と名付けている。かかる自然科学的人間観は人間を現象体と
 して考察する一の見方に違いないが、人間本性がこれに尽きるとは何人も考えない。「若し理性が人間に
 対して本能が動物にあつてつとめると同じことをなすためにのみ役立つべきものならば、人間が理性を有
 するということは、価値に於て彼を単なる動物以上に毫も高めはしない。」理性が人間に賦与された目的
 は、更に高い人間の使命を認識せしむる所にあると言つている。

カントによれば、理性は認識能力として感性と共に働き、感性界に法則を附与して自然界を構成する所
 の理論的使用の外に、我々の意志を規定し、行為を生ぜしむる能力としての重要な実践的使用がある。実
 践使用には二種の使用を区別せねばならない。第一は理性が感性的動機を待つて、このために適切な手段
 を考慮し、必要な規則を意志に規定する使用で、感性界の完全な召使いとして働くものである。この場合
 理性の意志に対する命法は凡て幸福を大前提とする仮言的命法である。第二は理性が感性界から全く独立
 し、何ら感性的動機を待つことなく、理性が理性だけで、自己固有の先天的法則を以て意志を規定する実
 践的使用である。その命法は定言的命法と呼ばれ、やがて我々の物自体としての實在性を証明する最も重
 要な純粋理性の実践的使用である。かような実践的能力を我々の理性が有することは、道德の事実存在に
 よつて明らかに証明せられている。特に道德律は、經驗的諸制約を捨象して注意深く吟味するならば、そ
 れが先天的形式的法則でなければならぬことは明らかである。かかる先天的法則は純粋理性のみの与え得

るものであり、この法則に基く意志規定は純粋理性によつてのみ可能でなければならない。純粋理性によつて規定せられた意志は純粋意志である。純粋意志は純粋理性の自己立法性に外ならない。自己立法とは自己原因性即ち自由であつて、純粋意志は自由意志に外ならない。かようにして純粋理性の自己立法性として、初めて我々の自由が認識せられることとなる。かかる実践理性による自由の事実存在なくしては、道徳律は存在し得ないのである。即ち「自由は道徳的法則の存在根拠であり、道徳的法則は自由の認識根拠でなければならない。」更に自由は、本体的原因性の理念として、本体にのみ帰せらるる性質である以上、自由なる意志の主体は、感性界の存在者ではあり得ず、超感性的な本体即ち物自体でなければならない。かくして、第一批判に於て否定せられた物自体は、理論認識とは全く別な道を辿つて、即ち実践理性の自覚として、その観知的にして自由な先験的性格が確認せられることとなり、我々の行為の主体として実践上不抜の實在性が基礎付けられることとなる。

凡そ現象は本体の現象でなければならぬ以上、現象界の凡ゆる我々の行為は、我々自体の本体的原因性の所産でなければならぬのであつて、逆に現象が本体の規定根拠であることは出来ない。道徳的要求は、正にこの本体の必然的要求を意味するものでなければならない。即ち実践理性は感性界の快苦、利害、幸不幸等の欲求に対して何等顧慮することのない要求を定立する。即ち道徳的法則の遵奉を命じ、凡ゆる行為は、この法則に適合するばかりでなく、同時に我々自体の自発的必然的な自由行為として行われることを要求する。この要求に合致する行為のみが、自己本体の行動となり得るが故でなければならない。この要求は、感性的存在者としての我々の我欲、自惚を破砕する威力として感ぜられ、我々の感性を触発して快苦の感性的感情とは全く異なる独特な感情、即ち畏敬の感情を生ぜしめる。これは感性的対象から生ずる感情ではなく、超感性的根拠に由来する感情として、これのみが唯一の先天的感情と呼ばれ、我々の心情に於て唯一の道徳的動機を構成するものである。これは道徳的法則に対する感情であると共に、この法則の主体に対する尊敬の感情であり、物自体としての自己は常に我々にとつて尊敬の対象でなければならない。それは感性的存在者としての我々の一々の行動を自由の法則によつて制約し、時間 に 於て経験的に規定し得る我々の全存在をこれによつて支配し、更に感性界の凡ゆる目的並に目的の全体を、同時にこの道徳的法則の支配下に置くものであり、これによつて初めて全感性界に目的を規定するものである。かくの如き人間本性の自覚こそ、人間をして他の一切の自然的存在者を遙かに超える高貴な存在者たらしめる所以のものである。カントはこれを人格性 (Persönlichkeit) と呼んでいる。人間が、この人格性に従う限り人格 (Person) と呼ばれる。人間は成程神聖ではない。しかし人格の中なる人間性 (人格性) は神聖でなければならない。又全宇宙に於て人の欲し、人の支配し得る一切のものは他の手段として用いられ得る。唯人間のみはこの人格性の故に決して他の手段として用いられるべきではなく、常に同時に目的そのものとして用いられねばならないと言っている。

人間は感性界と悟性界 (物自体の世界) に誇る存在である。感性界の側からは、自愛の動機を第一の動機とせざるを得ないような自然必然の傾向性の制約を受け乍ら、悟性界の存在者としての側からは、道徳的要求を唯一至上の動機とすべきことを断乎として要求せられる。ここに人間心情に於ける諸々の動機の葛藤が成立する。道徳的行為は、人格性の動機を至上最強の動機として、感性的動機を之に従属せしむる

所に成立する、然しその際、感性的動機は、道徳的心情の中に微塵も動機の意味を以て入り込むことは許されない。かような純粋な動機の秩序が、心情の中に確固不動のものとして確立せられる時、これを徳と名付ける。徳は感性的動機との戦いを経た永い道徳的努力の所産でなければならない。然し有限な人間にとつては、徳の完成は永遠な道徳的努力に待つより外なく、神聖な人格性は、限りなく接近し得るが、到底到達することの出来ない理念に止まらねばならない。

人間は人格性の動機を完全に欠如する程、禽獸的でもないし、不道徳を格率とする程惡魔的でもないが、經驗的に觀察する限り、人間には感性的動機を人格性の動機に優越せしめようとする根源的な性癖の存することは否定出来ない。義務にかなつた格率を遵奉するに当つても、法則のみを十分な動機として受入れたものではなく、義務以外の他の動機を必要とするような心情の不純が根底にあり得る。道徳を幸福の手段と考える思想の如きは、全き心情の腐敗、墮落と言わねばならない。總じて動機の道徳的秩序の転倒は、一切の惡と不徳の根源をなす。而かもこの事實は、最も純粋に見える道徳的行為の根底にも、理性的自愛の狡智として潜み得るし、最も高德な人に於てすらその心情の中に之を否定し得ない程である。ここに於て、人類はその先驗的性格に於て善であり乍ら、經驗的性格に於ては、本性惡であると断ぜざるを得ないことになる。我々は如何にしてこの心情の腐敗、墮落を脱却して、先驗的な本性の善へ復歸し得るのであるか。カントは漸進的な徳への努力や自己改善の方法では、この腐敗し切つた心情の改革は不可能である、一挙に心情の革命を成就して、全く新しい別人として誕生し直すのでなければならない。それには人間の努力の外に、神の超自然的協力、援助なくしては不可能であると論じている。

2

以上物自体としての人間本性に関してカントの思想と思われるものを概略述べてみたのであるが、結局、カントは我々の常識的立場では、彼が第二批判で論じたような物自体の実践哲学的認識に徹底し得るものではなく、感性界を唯一の實在として之に固執するものにとつては、感性的存在者と物自体的存在者と不可解な二つの自己が対立することになるか、若しくは感性的自己を直に物自体と同一視するかの結果となり、両者の眞の區別と正しい秩序による両者の綜合は困難である。これが宗教論に於て論じているように凡ゆる惡の根源ともなり、結局一挙に心情の革命という宗教的体験を成就するに非ざれば、人間の救済は不可能であると考えていたもののようである。心情の革命と言つても、現象的自己を脱ぎ棄てて、物自体的自己に生れ變ることに外ならない以上、それは物自体に関する限り、理論上の認識のみでは未だ眞に之を知ると言うには到らない、必ず心情の革命と稱するに足る物自体の体験が伴わねばならないことを確信していたものと言うことが出来る。本体的自己と現象的自己、実践的實在性と感覺的實在性との関係についても、カントの所説だけでは尚隔靴搔癢の感を禁じ難く、体験の上では見える自己 (sichtbares Selbst) は見えざる自己 (unsichtbares Selbst) の影であると言ひして論断し得ることも、理論的には容易ならぬ問題でなければならないのである。以下物自体の体験に亘る問題について、二三愚見を駄足として添えて見ることにする。

物自体の認識が体験に待たねばならぬことは、既にカントがこの認識を実践理性の自覚として論じてい

ることで明かである。実践理性の自覚とは、行為を媒介とする理性の自覚である。これは又行為を通してのみ物自体としての自己が現われることをも意味する。行為は単なる理性から生ずるものではなく、必ず身体を媒介しなくてはならない、理性と身体とを含む自己自体から生ずるものでなければならない。自己自体と云う時、それは単なる心とか理性とかを指すものでもなく、又単なる身体を指すでもない。心の統一と身体の統一との両者一となる所を指すのでなければならない。カント哲学で言うならば、純粹自我の統一作用の方向に求められねばならぬと同時に、現象（我々自身の肉体を含む）の背後の統一的或る物としての先験的対象の方向にも考えられねばならない。然し私自身の物自体はこの純粹自我と先験対象とが感性を媒介せずに直接結び付く所に存しなければならない。カントは感性と悟性とは知られざる根に於て結合すると言っているが、身心一に帰する我々自体の存する所は、認識論的には知り得べからざることもあろう。然し自覚すると否とに関わらず、身心一体の体験は、日常茶飯の事実として無意識に之を行い、ここに基いて行為が可能となつていてと考えねばならない。

我々の自己自体は身心一致の極致に存在しなければならないという理論のみによつて、自己自体の実在性が認識せられるわけではない。我々はこのために我々の五体を以ての実験を試みねばならないと思う。心の統一活動の全力が発揮されねばならないと共に、必ず身体の正しい統一活動が伴わねばならない。この両面の活動が打つて一丸となる所謂打成一片の処に感性的自己にとつては全く思いがけない自我自体の実在の真相が現前するのである。勿論かような体験がカントにもあつたかどうかを論じようとするのではない。唯、物自体を斯の如く解し、その理の忠実な励行者となる限り、我々の立場からは、その体験は次のようなものにならざるを得ないと思うのである。

それは意識の根底に徹すると言う意味に於ては、有意識、無意識を超え、忽然自我を打失する所謂絶対無の体験であるが、同時にそれは、身体との一致に於ける無心、無我、虚空の体験である。時間と我と異ならない、空間と我と二つではないという空性の体験でなければならない。拡げれば宇宙に遍満し、収めれば一粒中に隠れる底の自己空性の自覚であり、形あるものは、形なき空間の変容であることを自証する体験である。仏教では、虚空を体とし万象を照すを心とすると言っているが、空は心と同一であつて、一切を映し出す鏡にも比せられる。青来れば青を現じ、赤来れば赤を現するが、其自身青にも非ず、赤にも非ず、一切の感覚を在るが儘に映して、感覚の汚濁を被らない。又自己は時の消滅の中に在るのではなく、消滅する時を基礎付ける基底そのものが自己である。消滅する時を自己の影と見る永遠が即自己である。不生不滅とか、永遠とか言われる所以である。大澄国師は「自性本より現われて百千の日月よりも明かなり、茲に於て心を注げて明め取ることあり、これを見性と名付く」と言っている。仏教では、見性によつて仏性を悟ると言っているが、我々の言葉で言えば人格性を悟るという意味でなければならない。カントも人格性の神聖を論じているが、この体験によつて自覚せられる無相清浄の本性は、特に靈性と名付け、単なる精神とは区別せられねばならないと思う。又この見性こそ、我々を感性的存在者から靈性的存在者に生れ変らしめる心情の革命でなければならない。南北東西帰去来 夜更同看千巖雪という詩句があるが、大死一番、初めて自己脚下の不生の靈性、虚明歴々たる本性に直面するのでなければならない。

この心情の革命は、又感性に現われる現象界の意味を一変せしめ、感覚的存在者の意味を逆転せしむる

程のものである。柳は緑に本体を現わし、花は紅に本体を現わす、森羅万象尽く無相な自己本体を表現するものとして現われる。感性界はもはや認識主観の現象界ではなく、本体の現象界となる。即ち認識主観は消滅して、眼なくして見、耳なくして聞くのであり、その世界は、直接夫々の物自体が己を現わすものとなる。神聖な人格性も、人の中に理論的に推理して考えられるのではなく、無条件にその人の中に之を見るのである。言わば、カントの感性界と悟性界とが相重り、相合して同一の事態をなす、而も両界の区別は明白であつて混同せられることがない、即ちそれは表現の世界でなければならない。本体に関して之を見れば、目的の王国であるが、現象に関して抽象すれば感性界に外ならないのである。真実在の根拠は無形な所にあつて、有形な所にあるのではない、感覚的実在性は実践的実在性の基礎の上に始めて可能となり、前者は後者の影という意味を持たねばならぬものとなる。

我々の一切の活動、一切の行為は我々自体の絶対自由から出なければならない。この絶対自由と結びついた理性が、実践理性と呼ばれるものでなければならない。実践理性の自律としての自由は、既に物自体（空性）の自由を理性的に限定した自由であつて、物自体に於ける絶対自由とは区別せられねばならない。物自体の自由は、善悪、是非、美醜、浄不浄をすら超えた絶対自由でなければならない。これは物自体の無性の体験なくしては理解し得ない自由である。空なるが故に一切の有形の中に入り得、無なるが故に在らざる所がないとより言い現はし得ない自由である。善悪、是非、美醜、浄穢の中へも自由に出入して而もこれらの一切を超える自由である。カントが物自体の自由を斯様のものと解していたなどと言わんとするものではない。それは言う迄もなく、イデアやヌーメノンの西洋哲学思想の伝統に従つて理解すべきもので、カントの真意も其処にあつたことは疑う余地もないが、唯批判的なカントには尚これに不可認識の余地を残していることは注目すべきであり、ただ我々の体験は物そのものに関する限り此処に止まることを許さないのである。而かもこの体験は身体の協同なくしては不可能であることを繰り返し主張せざるを得ない。若しこれが身体的自覚の意味を持たぬ限り、自己自体の空性や絶対無の自覚体験には到底到り得るものではなく、それは単なる概念や理念の範囲を出づることなく、従つて概念の空無以外の何物でもない、又精々想像上の追体験として理解し得ても、何等の実在性を得ることも出来ないのである。これは理性的自覚であると同時に身体的自覚でなければならない、理性的にこの自覚に到り得るものならば、同等の理由を以て身体的にも此処に到り得るものでなければならない。我が国に於て、古来、剣道、柔道、弓道、画道、茶道其他の諸芸道に於て、単なる身体的技芸に過ぎぬものが何れにも道の字を附して用いられて来たことにも、我々は深い理由を見出すのである。この道に於て、若し神技、靈術と称し得るものが現われ得るとすれば、それは身心一如の靈性、絶対自由の体得に待たなくてはならない。而してこの靈性には、身体的技能を通して到り得ること、事実我々の意識を絶して、身体のみを持ち得る「身体智慧」とも称し得るものが存在し得ることを実地に経験し得るが故でなければならない。而してこの道に何等か関与した経験あるものにとつては、何等怪むを要しない問題である。教育に於て、身体の教育が直に人格性に連り、人格の形成や練成に預り得る究極の根拠も此処になければならないと思う。

然しかような体験によつて道徳が完了するのではなく、ここから道徳の第一歩が始まるのでなければならぬ。厳密に言えば、見性以前の行為は凡て虚偽であり、偽善であつたと言わねばならぬ。見性によつて、

始めて現象と本体、見える自己と見えざる自己の本末が明白となり、中庸に所謂隠れたるより顕わなるはなしと言うことも信条の事実となることが出来る。又これによつて我々の心情に於ける道德的秩序も揺ぎない確立への素地を与えられることになるが、道德は飽く迄も現象界の行為でなければならず、逞ましい意志の実践でなければならない。徳はこの行為を通じて經驗的に構成されねばならない。我々は心情の道德を携えて、現象界に向わねばならない。感性の世界に自由に出入し、芥頭土面の姿で道德律の実行に精進することが人間の義務である。カントの道德では、道德的動機が感性的動機を克服して道德的行為を生ずるのであるが、ここでは感性的傾向性が動機となる以前に、既に人格性がその中に入り込んで感性的欲求の主体性を握るのである。従つてこれが動機として心情に現われる時は、既に合法則的格率を成し、欲求は何等感性的動機の意味を持つことなく、従つて微塵も感性的不純に煩わされることなく、本性の必然からの自由行為、主体的行為として、これを行うことが出来るのでなければならない。

この秋は雨か暴風か知らねども今日の務めに田草とるなり

と云う歌があるが、現象界の行為の体系として見れば、自己幸福への一連の自愛的行為と見られるものが、本体界との関係、即ち人格性との関係に於ては、日々の行為と農民生活の全体が尽く道德的心情の発露であり、義務のために義務を行う純粋な道德的行為並に生活と見ることが出来、又此の如く行為し得るのでなければならない。或る人は飲食を口腹の欲のためにし、或る人は道を成ぜんがためにすることも出来る。色界に入つて色慾を被らず、声界に入つて声慾を被らず、隨所に主と成つて道德律の行者たることも出来る筈である。任運に衣裳を着けて行くと言う言葉もあるが、感性界の行為は、神聖な人格性が夫々の時と処によつて、種々な感性的衣裳をつけて現われて、道德的行為を行うと言うことにならねばならない。道德的偉大はなされる事業の大小、着けられた衣裳の美醜にあるのではなく、之を行う主体の人格性の偉大に懸つている。かくして我々は人々個々独自の個性の衣裳を纏い、夫々の時と処に於て、世界に於ける崇高な人格的価値の実現に参与し、偉大な人類文化の創造に与る義務と責任を有し、ここに人類の使命が自覚されるのでなければならないと思う。

付 記

本特集は本学部の諸教官の教育学についての見解を集めたものである。本号に研究論文をのせた教官、病氣休養・海外出張等万やむを得ざる事情のある教官をのぞいて、他のすべての教官が執筆した。「教育学とは何か」、「教育学は如何にあるべきか」、——こうした問題が教育学自体の最も根本的な問題に属する以上、こんな企は各方面においてくりかえして試みられてよいであろう。この試みが何程かの刺激となるならば、われわれの幸甚とするところである。なお執筆順序は、組版の都合上、やむを得ざる事情のある教官をのぞいては、五十音順にした。(編集委員)